

2017年2月22日（日）

梶原 剛

奨励：「成熟を目指して」(1)

—キリスト者にとっての成熟について—

1. はじめに

おはようございます。

私たちの人生では、スタートとゴールを迎えることがいくつもあります。例えば、学校は入学式がスタートで卒業式がゴールです。社会人として就職した場合、入社式がスタートで、退職する日がゴールです。最近の日本では、終身雇用制度がどんどん衰退していますので、学校を卒業して初めて就職する会社でそのまま定年退職日を迎える人は少なくなっていると思いますが、途中で退職しても、定年で退職しても、その会社との関係では、退職する日がゴールです。途中で退職する場合は、新しい会社に入社することになるでしょうから、何歳であっても再びスタートを迎えます。

小学校、中学校は義務教育ですから、特殊な事情でもない限り、皆さんは卒業をされていらっしゃると思います。小学校が6年、中学校が3年です。そのスタートとゴールは、同じように、平等に迎えることとなります。しかし、同じスタートに立っても、そのゴールを迎えるときに、同じだけの成果を得ているとは言えません。それぞれ、同じ6年間、3年間でどのように過ごしたのかによって、得ることができる成果は変わってきます。勉強を頑張った人が得る成果と、スポーツを頑張った人が得る成果は違うでしょうし、何もしなかった人にもそれなりの成果はあると思います。努力は人を裏切らないと言う人がいます。その出典が気になって調べてみたのですが、どうも古くはゲーテが「つねによい目的を見失わずに努力を続ける限り、最後には必ず救われる。」と言ったことや、王貞治氏が「努力は必ず報われる。もし報われない努力があるのなら、それはまだ努力と呼べない。」といったことや、通信教育のZ会の情報誌にもこの言葉が取り上げられていたようです。ゲーテや王貞治氏のような人がこのようなことを言うと、説得力が違いますね。

さて、聖書をお読みになっている方、特にイエス・キリストによる救いを経験された方にとって、聖書が教えるスタートは何か？を考えるなら、それは「イエスを救い主として信じ受け入れたとき」ということについては、おわかりかと思います。このスタートは、すべての人に対して平等に開かれています。ですから、誰でもその救いを受け入れたいなら、すべての人に平等に与えられます。老若男女、国籍、人種、時代、いろんな違いがありますが、一切関係がありません。裕福であっても貧しくても、幸せを感じている人でも不幸のどん底にいる人でも同じように与えられます。

では、聖書が教えるゴールとは何でしょうか。イエスを救い主として受け入れた人にとってのゴールとは何でしょうか？

そりゃ、天国に行くときでしょ？と思われるかもしれませんが、確かに、天国に行くとき以外にクリスチャンのゴールはないかもしれませんが、それは時間的なゴールでしかありません。小学校、中学校は6年、3年を経過すれば等しくそのゴールを迎えますが、これも時間的なゴールでし

かありません。クリスチャンとして何年生きることができるか。この地上で生活することができるか。この期間は平等ではないかもしれません。実際、聖書の中でイエスは、朝早くから働いても、9時から働いても、12時、3時、5時から働いても1デナリずつもらうというたとえ話（マタイ20章）で、その主人は朝早くから働いて、不平を言う雇われた者たちに『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。』と諭しつつ、その趣旨は『私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。』ということを示されたように、この地上でのクリスチャンとしての生活の長短にかかわらず、同じだけのものをいただくことを教えられました。小学校、中学校を卒業するときに卒業証書をいただきますが、まさに同じかと思います。どのように優秀な生徒であっても、卒業証書は同じです。優秀な生徒には金箔のついた卒業証書がもらえるということではありません。

では、何もしなくてもよいのか。ただただ、クリスチャンとしての最後を待つだけでよいのか。そういうことではないと思います。

ルカの福音書 19:11-27 を開きましょう。

イエスは「ミナのたとえ話」を通して、1ミナを10ミナにした人、5ミナにした人、何もしなかった人について教えられました。最後の方は増やせなかったのではなく、何もしなかったのです。その行為に対して、主人は『なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』と非難したことが教えられています。『増やせたかどうか』ということと、『何かをしたかどうか』ということがこのたとえ話のポイントであることがわかります。どれだけ増やせるかどうかはわかりません。しかし、どれだけ増やせたかどうかは、成果という形では表されましたが、この主人の評価の基準は「どれだけ増やしたか」ではなく「商売をする＝増やすために何かをしたのか」ということでした。主人の命令は「商売をすること」です。銀行に預けてほんの少しの利息を受け取るようなことでも、主人はぎりぎり「商売」として認めてもよかったということでしょう。

このたとえ話からわかるように、神は私たちが「何か」をして、「何か」を得ることを期待されていることがわかると思います。何もしなくてもいつかはゴールを迎えます。しかし、スタート地点に立って、そのままの状態でもゴールを迎えるのではなく、何かをして、何かを得てゴールを迎えることが神の御心であり、何かを得ることによって、私たちは神から『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だった』という評価を受けることができる、ということかと思えます。

10ミナ、5ミナをお金、通貨と考えるなら、それは単なる利益の大きさ、収益の大きさということになるかもしれませんが、これを「価値」と考えるなら、それは収益の大小だけではありません。会社であれば、売上高や利益というような、数値で直接測定できるものだけでなく、社員の働きやすさや社会に対する貢献度、顧客満足度など、いろんな測定方法によって「価値」が測定されます。では、クリスチャンとして、神を信じるものとしての「ミナ」とは何か。そして、それを大きくするためにはどうすればよいのか。私たちは、この点にフォーカスすることができるなら、私たちが

クリスチャンとしてのゴールを迎えるときに、同じようにいただくことができる卒業証書だけではなく、より豊かなクリスチャンとしての満足、達成感を持つことができると思います。

端的に言えば、聖書が教える「ミナ」が、私にとっては何を意味するのか。それを探してみましよう、ということになります。そのミナは、おそらく、今日お集りの皆さんそれぞれ「違う」ものではないかと思います。皆さんは、クリスチャンとして「どのようなゴール」を迎えたいと思いますか？

今年は、定期的にお話しさせていただく機会をいただけるとのことですので、しばらく「成熟を目指して」というテーマでお話をさせていただきたいと思います。今日は、第1回目ということで、キリスト者にとっての成熟の「入口」について考えましょう。今取り上げましたイエスのたとえ話をを用いるなら、皆さんそれぞれにとっての「ミナ」は何か？ということをはっきりと明らかにしていきましょう、ということになります。今日お集りの皆さんの中にはまだクリスチャンではない方、聖書についてよくご存じではない方もいらっしゃるかもしれませんが、クリスチャンの成熟についてご理解いただくことが、神を信じること、イエスを受け入れること、またその決心をされることに役立つと思いますので、ご一緒にお聞きいただければと思います。

2. パウロは何を捨てて何を得たのか

では、まずパウロについて考えてみたいと思います。何と云っても、新約聖書に登場する人物の中で、最も象徴的な人物と言え、パウロでしょう。

私たちは、新約聖書に登場するパウロについて、クリスチャン的な理解や視点で言うなら、もう非の打ち所がない、完璧な人物であると言っても過言ではないと思います。そして、完璧であるので、もっと言うなら完璧すぎるので、そもそもパウロのようになる、彼の人生を辿ってみる、彼の人生に倣うというような発想はちょっと重たいことになるかもしれません。

パウロは、ユダヤ人として生まれました。彼の出自については、彼自身がこのように言っています。ピリピ人への手紙 3:5-6 を開きましょう。

3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、

3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

ユダヤ人としての環境、生き方については、非の打ち所がなく、律法に対しては誰よりも厳格に生きた人です。当時の社会においては、パウロはいわゆる成功者であったはずで、人が羨むような成功者です。しかし、彼のクリスチャンとしての成果は、このようなユダヤ人としての環境や生き方には全く関係がなかったことを、彼自身が同じピリピ人への手紙で告白しています。

3:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。

3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。

私は、このパウロの告白を読むたびに思う彼の偉大な点の一つは、彼は「ユダヤ人としての過去を捨てた」ということです。その過去は、確かにクリスチャンとしての価値観から考えるなら不要なものかもしれませんが、パウロ自身がユダヤ人であることは、これは捨てるに捨てることができない事実です。生まれながらにユダヤ人なのですから、捨てることができない。しかし、ユダヤ人であることを捨てることができないのに、ユダヤ人として最も評価される、評価できるものを全部捨てた、と告白しているのです。私自身のことを考えますと、残念ながら捨ててもいようなものをいっぱい持っていると思います。クリスチャンとしての価値観から考えるなら持たなくてもいいようなものに、自分自身の安心や自信（プライド）を感じるがあります。物理的なものであれば、捨てることは決心さえすればできるかもしれませんが、しかし、彼が捨てたものは生き方や価値観、すべて人間の内面的なものです。ごみ箱にポイッと捨てて、ごみ収集車に持って行ってもらえば終わり、というものではありません。捨てようとしても、あるいは捨てた、と思っても、いつでも、いくらでも復活できるものです。それを彼は捨てたと告白しているのです。それはその瞬間だけのことではなく、捨てた瞬間から彼が人生を終えるまで、それらのものに全く手を出さなかった、魅力を感じることもしなかったのです。8節で「それらをちりあくとしています。」と言っていますが、口語訳聖書では「それらのものを、ふん土のように思っている。」もう、ごみどころか、絶対に手を出さないふん土だ、と言っています。

では、パウロはユダヤ人としての過去をすべて捨てた上で、一体何を得たのか。

ピリピ人への手紙を読み進めますと、このように教えられています。

3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとしています。それは、私には、キリストを得、また、

3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

彼は、3つの望みを得たと教えています。まず一つ目が「キリスト」です。

3-1. キリストを得る

このテーマを深く考えるなら、とても短い時間でお話しできるようなことではないと思います。彼はキリストを得る望みを得た、と教えました。キリストを得るとはどのようなことでしょうか。

何よりもまず、キリストを得るということは、キリストとの正しい関係を得たということかと思えます。キリストとの正しい関係とは、言い換えるならイエスがパウロにとって「キリスト」すなわち救い主となられた、ということです。聖書はイエス・キリストについて教えますが、イエスがキリストであるということは、それを認めた人、イエスがキリスト、救い主であることを受け入れた全ての人に対して神が保障されていることですが、教会を迫害し、次々にクリスチャンを捕えては投獄していたパウロにとって、イエスをキリストとして認め受け入れることが許されたのは、大変大きな神の憐みであったということを実感していました。

イエスとの正しい関係、イエスをキリストとして認め受け入れることによって得られる正しい関係を、パウロは「キリストを得る」という表現を使いました。私は、この得るという言葉をもう少し深く探りたくて、英語の聖書を開いてみましたが、ほとんどの聖書で同じ表現が使われていました。I may (might) gain Christ. という表現です。King James Version, American Standard Version, Common English Version, New American Bible, New International version など、ほとんどの聖書で同じ表現です。他の表現では I may win Christ. (21st century King James Version) というのがありましたが、おそらく、他に適切な訳がない、キリストを得るという表現を、パウロは非常にシンプルに、わかりやすくこの手紙に書いたのだと思います。KJ21 の表現を訳すなら、私はキリストを獲得し、ということかと思えます。

言葉遊びにならないように気を付けたいと思いますが、私はこの「キリストを得る」あるいは「キリストを獲得する」という表現を考えますと、また、それを自分自身にも当てはまることとして考えますと、二つの素朴な感情が湧いてきます。一つは「キリストを得るという表現を実感するほど、自分自身はキリストに近く生きているのだろうか」、もう一つは「私自身の力、価値によってキリストを得たとは全く言えない」ということです。

キリストを得る、という事実を知っているのと、その事実が自分自身の力の源泉となっているのでは、大きな違いがあります。パウロにとって、キリストを得る望みが、彼のとてつもない宣教の力の源泉になっていたことは、彼自身もこのように証ししています。ピリピ人への手紙 4:13 を開きましょう。

4:13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。

13 節には、このような意味があります。

「私は、キリストの充足のうちにあって自足しています。」

パウロにとって、キリスト以外のものは何一つ必要ではありませんでした。もちろん、食べ物は必要です、水も必要、着るもの、住むところも必要でしょう。そういう次元のことではなく、彼がこの地上で生きていくために必要な力は、すべてキリストがパウロを満たし、パウロはそれで自足できていたのです。彼には、キリストによっては満たされない部分を、他のもので埋める必要がなか

った。キリストによって満たされない部分がなかったからです。だからこそ、彼はユダヤ人としての過去は何の惜しげもなく、ふん土のように捨てることができたのです。

もし、私たちが、キリスト以外のものを持っているとして、少なくとも私自身はいろいろなものを持っていることを認めざるを得ませんが、それを捨てようと思うなら、捨てる努力をするのではなく、キリストの充足、キリストによって満たされることを求めるべきであることを、パウロはその証を通して、暗に私たちに教えているようです。なぜなら、彼は捨てた理由を、キリストを得たからだ、と教えているからです。

では、二つ目の望みについて話を進めたいと思います。

3-2. キリストの中にある者と認められる

パウロは、キリストの中にある者と認められる望みを得た、と教えました。一つ目のキリストを得ることが、イエスとの正しい関係、イエスが救い主であるということを受け入れることによって与えられる関係を意味するなら、このキリストの中にある者とは、イエスとの交わりが与えられた、イエスと交わることができる親しい関係になったということの意味するのかと思います。

キリストを得るということと同様に、このキリストの中にあるものと認められるという望みについて考えるなら、私自身はどれほどこの事実を体験しているのか、と思うのと同時に、この交わりの中、キリストの中にいるにもかかわらず、その外側にいるような錯覚と、外側から何とか内側に戻ろうとする不要な努力、焦りを感じているようにも思います。

聖書は、キリストの十字架によって私たちの罪が完全に解決したことを教えます。キリストの十字架による贖いには、何一つ不足がありません。キリストの十字架によって許されない私たちの罪はありません。イエスの十字架が完全な救い、贖いを私たちに与えてくださいました。しかし、現実の問題として私たちが罪とは全く無縁の生活になったかと言えば、そういうことはありません。ユダヤ人の基準に照らしてみても非の打ち所がないパウロでさえ、キリストの十字架の基準から考えるなら、自分自身がどうしようもない、みじめな罪人であることを、ローマ人への手紙 7:15、7:21-25 で教えています。

7:15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。

7:21 そういふわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。

7:22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでるのに、

7:23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。

7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

7:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

パウロの告白ですが、では彼は「みじめな人間」＝キリストの外側、キリストの外にいる者ということと言いたかったのでしょうか。そうではないですね。彼は、自分自身がみじめな人間であるのでキリストの外側にいる、あるいは外側に出てしまったということは言っていません。むしろ、キリストの中にある者という希望を与えられているにも関わらず、キリストの外にいる者かのような状態になる弱さを持っていることについて、自分自身がみじめであるということ告白していると理解すべきだと思います。

言い換えれば、もし私たちの霊性が高く、あるいは信仰者としての状態、状況が良く、神に近く生きていくと実感できることがあったとしても、それは私たちの行い、私たちの状態が良いから私たちはキリストの中にいるのではなく、その中にいることはキリストの贖いのおかげでしかない、それ以上のものでもそれ以下のものでもないのです。キリストの中にいようとする努力、キリストの中に戻ろうとする努力をしてしまうかもしれませんが、私たちがキリストの中にある者とされたのは、100%キリストの贖いのおかげであって、私たちの努力、行為、資質、良さ、性格などは何一つ影響していないのです。だからこそ、私たちがキリストの中にある者とされていることは、驚くべき事実なのです。私たちの側には全く何の理由も原因もないのに、ただキリストの贖いのおかげで、100%キリストの中にある者と変えられているのです。変えられつつあるのではなく、いつか変えられるのを待っているのでもなく、既に変えられているのです。この事実をしっかりと理解し、受け止めることが大切です。というのは、サタンはいつもこの点を突いてくるからです。そんなに弱いのに、そんなにけがれているのに、そんなに不十分なのによくまあキリストの中にあるなどと言えるものだ。お前は神から遠い。キリストから遠い。そこに戻るために不断の努力をしなければならぬ。このようにささやいてくるからです。神に対して忠実に生きようとする姿勢は重要です。しかし、それと私たちの霊的な立場、与えられている恵みや祝福とは何の関係もありません。

では、最後の点に進めたいと思います。

3-3. 信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる

信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができるという望みが与えられていることをパウロは教えました。100%神の中にある者とされている私たちには、同じように100%信仰に基づいて、神から義が与えられるのです。

私たちは、この神から与えられる義について、意識しているのでしょうか。パウロは、ローマ人への手紙で、またこのピリピ人への手紙で、神の義について教えますが、同時に私たちにも義が与えられたことについて教えます。同時に、不義の世界に対して、私たちは完全に無関係になったということでもあります。キリストの中にある者とされたということは、キリストの外側にあるものとは何の関係もなくなっているのです。そして、神の義を持つことができるということは、いや、神の義を持っているということは、神に近づくことができるということでもあります。パウロはこのよ

うに教えています。エペソ人への手紙 3:12 を開きましょう。

エペ 3:12 私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができます。

信仰によって与えられた義により、大胆に確信をもって神に近づくことができる、と教えました。いかがでしょうか。神に近づくという点については同意されるかもしれませんが、大胆に確信をもってという点についてはいかがですか？私自身を顧みても、残念ながら恐る恐る神に近づいている自分を感じる時があります。恐る恐るではないにしても、大胆かと問われるとそうではない自分を感じることもあります。大胆に近づかなくても、恐る恐るでも近づいているのだからいいのでは、と思われるかもしれませんが、神が望まれるのはそのような近づき方ではありません。奴隷が恐る恐る主人に近づくような関係ではなく、子が親にいつでも、どのような形ででも喜んで近づくことができるのと同じような関係を、私たちではなく神が求め、神がその道をキリストによって開かれたことを、100%受け入れ、そのように生きることが必要です。なぜなら、神がそう願っておられるからです。

パウロは3つの望みを得ましたが、今お話した内容からわかるように、彼自身のユダヤ人としての背景は、この望みには何の関係もありませんでした。つまり、ユダヤ人でなければ、ユダヤ人として立派に生きることもできない私たちにも、同じようにこの3つの望みを得ることができるのです。パウロと全く同じように、私たちもこの望みをいただくことができます。

さて、そろそろ今日のお話を終えたいと思いますが、実は今日お話しさせていただいたことは、取り上げ方や話し方、組み立て方の違いはあるかもしれませんが、目新しいことではなかったと思います。今日、初めて聞きました！という内容ではないと思います。そういう点では、ちょっとがっかりされた方もいらっしゃるかもしれませんが、非常に重要なこととして、パウロも、そしてヘブル書を書いた人物もあることを警告、注意しています。

ピリピ人への手紙 3:10-16 を開きましょう。

3:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、

3:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

3:12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。

3:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、

3:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

3:15 ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこ

かでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。

3:16 それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。

ヘブル書 6:1-3 を開きましょう。

6:1 ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進むうではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、

6:2 きよめの洗いについての教え、手を置く儀式、死者の復活、とこしえのさばきなど基礎的なことを再びやり直したりしないようにしましょう。

6:3 神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。

彼らは共通して、前に進むことを教えています。キリストについての初歩の教えをあとにし、すでに達しているところを基準として進むべきだ、ということをお教えます。

今日のお話の後半は、パウロが教えた私たちに与えられている希望について触れました。大変、大変重要なポイントです。しかし、これらは「成熟の入り口」であって、パウロも、ヘブル書を書いた人物も、それを基準として、さらに前に進むことを勧めています。十字架を思い、キリストの復活を思い、感謝をささげることが大変重要です。私たちに与えられた恵みを感謝することもとても重要です。しかし、神はもっと先のことを私たちに示し、それを与えようとしておられます。私たちは、世間で大きく評価されるような、象徴的な人にはなれないかもしれません。また、ユダヤ人としての視点でパウロを考えるなら、私たちにとっては遠すぎるモデル、目標になってしまうかもしれません。しかし、それ以上にもっと大きな、比較できないほどもっと大きなミナを得て、ゴールを迎えることができることを、神は聖書を通して教えています。この大きなミナを、これから何回かいただいている北浜チャーチでの礼拝でのご奉仕を通して、皆さんと一緒に考えたいと思います。十字架と葬り、復活によってもたらされた大きな救いと恵みを土台とし、これをスタートとして、その先にあるものを考えましょう。そして、神が私たちそれぞれに用意されているミナについて、言い換えれば霊的な賜物や個性ということになるかもしれませんが、このミナについて学び、それを、信仰生活を通して自分のものとし続けることで、ゴールを迎えるときにミナを5倍、10倍、いやもっと大きなものにすることを考えましょう。このために重要なことは多分二つです。大きなミナが与えられることを期待すること、それを欲しいと思うこと、この二つです。その二つを持ち、信仰をもって神に求め続けるなら、私たちは成熟へと近づくということをお、パウロとヘブル書の記者は教えます。

祈りましょう。